

青年期における母親との愛着と抑うつ，対人恐怖心性の関連

15011PCM 古川 真珠奈

I. 問題

Bowlby (1973 黒田他 1991) は愛着を，ある特定の他者に対して強い結びつきを形成する人間の傾向と述べた。内的作業モデルは，愛着対象が誰であり，どこに存在し，どのような反応を期待できるかについての主観的な確信と，自分自身が愛着対象にどのように受容されているか，あるいは受容されていないかについての主観的な確信から構成されている。愛着の安定性は精神病理に対する保護因子となり，不安定型愛着は危険因子であり，抑うつの程度の高さ，不安，敵意，心身症，そして自我弾力性の低さといった特徴と関連しているようである (Fonagy, 2001 遠藤・北山監訳 2008)。

青年期は第2の分離個体化の過程にあり，心理的にも経済的にも，さまざまな側面から自立の道へと進む。福島 (1992) によると，日本の親子は，親と言っても父親の影は薄く，母親の影響が大きいようであり，青年期のどこかで親子の関係性が革命的に変わるといふ現象が見られず，青年期中期にかけて次第に親との関係が薄くなり，自立の芽が認められるという。

塚原 (2011) は，近年の大学生の抑うつ傾向は高まっていると述べている。また，現代の若い世代では，「新型うつ」という従来のうつ病とはタイプの違ううつ病が増えているという (斎藤, 2011)。「新型うつ病」の回復にあたり，対人刺激が大きな意味を持つという。対人関係と抑うつの関連が示唆されており (杉山, 2005)，質問紙調査を用いた研究では，対人恐怖心性と抑うつ傾向が密接に関連していることが明らかにされている (鎌倉, 2012)。

内的作業モデルは，友人・学校の先生などの重要な他者からの影響でも変化し得るようであるが (戸田, 1991)，現在の母親との愛着が不安定な者は，過去に，重要な他者による愛着の

質の大きな転換を持つことができず，その機会を逃してきたと考えられ，幼少期からの内的作業モデルが持続されていると考えられる。よって，青年期における母親との愛着は，対人恐怖心性に影響を与えていると推測される。

そこで本研究では，母親との愛着が対人恐怖心性と抑うつに与える影響について量的調査により検証するとともに，その関連の背景を投射法的心理検査によって明らかにすることを目的とする。

II. 研究1

1. 目的

母親との愛着が不安定な者は，対人恐怖心性ならびに抑うつが高くなると仮説を立て，青年期における母親との愛着と対人恐怖心性ならびに抑うつの関連を検討する。

2. 方法

調査対象者：A大学の大学生234名を対象に質問紙調査を実施した。有効回答227名（男性54名，女性173名，平均年齢19.8歳）を分析対象とした。

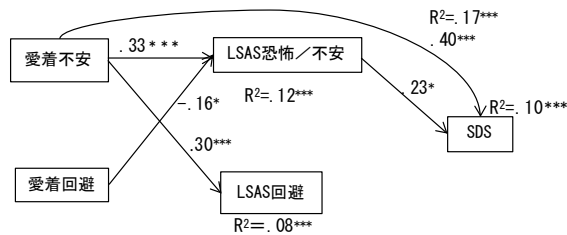
調査手続き：授業時間内の一部で質問紙を配布し，集団で実施し，その場で質問紙を回収した。

質問紙の構成：フェイスシート，親への愛着尺度 (丹羽, 2005)，日本語版 Liebowitz Social Anxiety Scale (朝倉他, 2002)，自己評価式抑うつ尺度 (福田・小林, 1973)，心理検査への協力を求める依頼文から構成された。

3. 結果と考察

各下位尺度間の関連を見るため，強制投入法による重回帰分析を行った (図1)。その結果，愛着不安は，LSAS 恐怖／不安感と LSAS 回避，抑うつに正の影響を与え，LSAS 恐怖／不安感 は抑うつに正の影響を与えていることが示された。よって愛着不安において仮説は支持された。

愛着回避は、LSAS 恐怖／不安感に負の影響を与えていることが示された。日本における、表向きは甘えを良しとしない社会的な風潮（山田・宮下, 2007）から、なるべく母親に頼らず、問題を解決したいという気持ちが高まると考えられる。よって、母親からの愛着回避の高低に関わらず、対人恐怖心性が高くなったり、低くなったりする可能性があるかと推測できる。



注：有意なパスのみ描いてある

* $p < .05$ *** $p < .001$

図 1. 親への愛着尺度と LSAS, SDS の関連。

III. 研究 2

1. 目的

研究 1 において、明らかにされた愛着の不安定さ、対人恐怖心性および抑うつの高さの背景を、投映法によって明らかにしていくことを目的とする。

2. 方法

調査対象者：研究 1 の分析対象者で、愛着不安高群で、LSAS の得点が高めから重度、SDS 軽度から中等度の者、3 名に対して心理検査を実施した。

心理検査の種類：SCT, HTP, 動的家族画, ロールシャッハ法を実施した。

3. 結果と考察

各心理検査の結果から、協力者 3 名には、抑うつ並びに対人恐怖心性の高さが示された。情緒の統制が弱く、理性により感情を抑制しがちであり、自我に柔軟性がない事、思考や空想活動が活発である事、誇大感を持っている事、周囲との軋轢を避け、受け身的で自己抑制しがちである事、情緒的刺激に臆病であり、愛情欲求・依存欲求や承認欲求が強い事が協力者 3 名の共

通点として考えられた。また、協力者 3 名の母親のイメージは、意識的にも無意識的にもネガティブなものであり、「操作性の強い母親」という共通点が考えられた。

IV. 総合考察

研究 1, 研究 2 の結果から、協力者の幼少期の頃までの母親との不安定な愛着の可能性も示唆された。幼少期からの、母親の共感的な反応といったあたたかい情緒的な交流や、母親からの鏡映自己対象体験の乏しさが示されている。思うような反応が母親から返ってこなかったり、受け入れてもらえなかったり、そのうえ、必要以上に怒られたりしたことにより、映し返しの欲求は満たされなかったのだろう。このような自己対象体験の失敗は、自己の断片化と空虚化を促進させる。応答性のある環境は心理的健康にとって欠くことのできないものである (Wolf, 1988 安村・角田訳 2001)。幼少期からの母親との自己対象体験の乏しさが、自己主張をしたり、助けを求めても応答してくれない、受容してくれないという心的表象を作り上げたと考えられる。

そして、対人恐怖心性の背景には、他者から応答されない、受容されないという心的表象があると考えられ、誇大的で、他者から認められたい気持ちが強く、傷つきやすい自己は、他者を恐れ、回避するという行動が生じていると考えられる。また、3 名の母親イメージには「操作性の強い母親」という共通点があった。母親に近接したい、依存したいが、近づくとも主体性が奪われるという感覚があるのだろう。他者と関わることで、自分がなくなる不安があり、それもまた対人恐怖心性の背景にあると考えられる。

今後は、母親との愛着が安定しており、対人恐怖心性および抑うつが低い者などと比較することが必要と考えられる。また、3 名という少ない人数では、実証的なデータとは言えず、偏りのある結果になるだろう。今後は、調査面接の協力者の数を増やし、数量的なデータを得て分析することが必要であると考えられる。